

しんぱん
新版

しどうようもんしゅう
指導要文集

だいいっしょう

第一章

しんじん

信心の基本

きほん

いっしょうじょうぶつ

一生成仏

ぶつかいゆげん

・ 仏界湧現

しゅじょう

ぶっちけん

ひら

ほつ

ねはんぎょう

い

「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」。涅槃經に云わ

だいじょう

がく

もの

にくげんあ

な

く「大乘を学する者は、肉眼有りといえども、名づけて

ぶつげん

とうろんぬん

まつだい

ぼんぷ

しゅつしろう

ほけきよう

しん

仏眼となす」等云々。末代の凡夫、出生して法華經を信

にんかい

ぶつかい

ぐそく

ゆえ

ずるは、人界に仏界を具足するが故なり。

によらいのめつこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしろう

006 如来滅後五五百歳始觀心本尊抄

いつしろうじょうぶつ

ぶつかいゆげん

一生成仏・仏界湧現 127 ページ 15 行

じっかいごぐ
十界互具、これを立つるは、石中の火・木中の花、信じ
がた
難けれども、縁に値って出生すればこれを信ず。人界
えん
しよぐ ぶっかい すいちゆう ひ かちゆう みず もつと 甚 しん にかい
所具の仏界は水中の火・火中の水、最もはなはだ信じ難
し。

006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄

によらいのめつこのごのひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしよう

いっしょうじようぶつ ぶっかい ゆげん

一生成仏・仏界湧現 128 ページ 15 行

「我がごとく等しくして異なることなからしめん。我が

むかし ねが

昔の願いしところのごときは、今、すでに満足しぬ。

いつさいしゅじよう

け

みなぶつどう

い

みようかく

しやくそん

一切衆生を化して、皆仏道に入らしむ」。妙覚の釈尊は

われ けつにく

いんが

くどく

こつずい

我らが血肉なり。因果の功德は骨髓にあらずや。

006

如来滅後五五百歳始観心本尊抄

によらいのめつこのごのひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしろう

いっしょうじようぶつ

ぶつかい ゆげん

一生成仏・仏界湧現 135 ページ 3 行

ほけきよう と

しゅじよう

そくしんじようぶつ

おし

あた

「法華経を説いてあらゆる衆生に即身成仏の教えを与えたの

ほとけ

しゅじよう

ひと

さべつ

ほとけ

むかし

で 仏と衆生は等しくなり差別がなくなった。仏がその昔に

ねが

しゅじよう

さと

きようち

いた

ちか

願ったところのあらゆる衆生を悟りの境地に至らせたいとの誓い

いま

まんぞく

しゅじょう

じょうぶつ

みち

い

が、今はすでに満足し、あらゆる衆生をすべて成仏への道に入

ほけきようほうべんぼん

そう

らしめることができた」と（法華経方便品に）あります。総じて

ごほんぞん

しん

たも

わたし

ち

にく

みようがく

しゃくそん

おな

御本尊を信じ持つとき、私たちの血や肉は妙覚の釈尊と同じで

ほとけ

くおん

とお

むかし

つ

くどく

ほね

ずい

あり、仏が久遠の遠い昔から積んできた、すべての功德が骨の髄

となつていくのです。

さんによぜ

さんじんによらい

い

さんによぜ

されば、この三如是を三身如来とは云うなり。この三如是

さんじんによらい

余所

おも

隔

が三身如来にておわしましけるをよそに思いへだてつる

わ み うえ

が、はや我が身の上にてありけるなり。かく知^しりぬるを、

ほけきよう

覺

ひと

もう

法華經をさとれる人とは申すなり。

じゆうによぜじ

019 十如是事

いっしょうじようぶつ

ぶつかいゆげん

一生成仏・仏界湧現

355 ページ 3 行

みようほうれんげきよう

たい

「妙法蓮華經の体のいみじくおわしますは、いかような

たい

たずい

る体にておわしますぞ」と尋ね出だしてみれば、我が

しんしょう

はちよう

びやくれんげ

心性の八葉の白蓮華にてありけることなり。

じゅうによぜじ

（019 十如是事

いっしょうじようぶつ

ぶっかいゆげん

一生成仏・仏界湧現 356 ページ 15 行

みようほうれんげきよう

われ

しんしよう

そう

いつさいしゅじよう

この妙法蓮華経とは、我らが心性、総じては一切衆生

しんしよう

はちよう

びやくれんげ

な

おし

たも

ほとけ

の心性、八葉の白蓮華の名なり。これを教え給う仏の

みこと

むし

このかた

わ

しんちゆう

しんしよう

まよ

しやうじ

御詞なり。無始より以来、我が身中の心性に迷つて生死

るてん

み

いま

きよう

あ

たてまつ

さんじいそくいち

ほんかく

を流転せし身、今この経に値い奉つて三身即一の本覚

によらい

とな

あらわ

げんぜ

ないしやうじやうぶつ

の如来を唱うるに顕れて現世にその内証成仏するを、

そくしんじやうぶつ

もう

即身成仏と申す。

いちねんさんぜんほうもん

(020 一念三千法門

いつしやうじやうぶつ

ぶっかいゆげん

一生成仏・仏界湧現 362 ページ 5 行

みようほうれんげきよう
とな
とき
しんしょう
によらいあらわ
妙法蓮華經と唱うる時、心性の如来顕る。

いちねんさんぜんほうもん
(020 一念三千法門)

いつしょうじょうぶつ
ぶつかいゆげん
一生成仏・仏界湧現
362 ページ 9 行

ほけきよう ぎようじゃ

によせつしゆぎよう

かなら

いつしよう

うち

いちにん

法華經の行者は、如説修行せば、必ず一生の中に一人

のこ

じようぶつ

たと

はるなつ

た

つく

わせ

も残らず成仏すべし。譬えば、春夏、田を作るに、早・

おくて

いちねん

うち

かなら

おさ

ほつけ

晩あれども、一年の中には必ずこれを納む。法華の

ぎようじゃ

じよう

ちゆう

げこん

かなら

いつしよう

うち

行者も、上・中・下根あれども、必ず一生の中に

しようにとく

証得す。

(020 一念三千法門

いちねんさんぜんほうもん

いつしようじようぶつ

ぶっかいゆげん

一生成仏・仏界湧現 363 ページ 9 行)

ひみつ

おうぞう

ひら

しよう

みよう

みょうらく

「秘密の奥蔵を発く。これを称して妙となす」。妙楽

だいし

もん

う

い

ほつ

かい

とううんぬん

大師、この文を受けて云わく「発とは開なり」等云々。

みよう もう

妙と申すことは、開かいということなり。

せけん

たから

つ

くら

かぎ

ひら

難

世間に、財を積める蔵に鑰なければ、開くことかた

ひら

くら

うち

たから

み

し。開かざれば、蔵の内の財を見ず。

ほけきようだいもくしよう

みよう

さんぎ

こと

033 法華経題目抄（妙の三義の事）

いつしようじようぶつ

ぶっかい ゆげん

一生成仏・仏界湧現 536 ページ 10 行

いっぺん

しゅだい

とな

たてまつ

いっさいしゅじょう

ぶつしろう

みな呼

一遍この首題を唱え奉れば、一切衆生の仏性が皆よば

あつ

とき

わ

み

ほつしろう

ほつぽうおう

さんじん

れてここに集まる時、我が身の法性の法報応の三身とも

引

あらわ

い

じょうぶつ

もう

れい

にひかれて顕れ出ずる、これを成仏とは申すなり。例せ

かご

うち

とり

な

とき

そら

と

しゅちよう

どうじ

あつ

ば、籠の内にある鳥の鳴く時、空を飛ぶ衆鳥の同時に集

み

かご

うち

とり

い

まる、これを見て籠の内の鳥も出でんとするがごとし。

しょうぐもんどうししょうじょう

034 聖愚問答抄上

いっしょうじょうぶつ

ぶっかいゆげん

一生成仏・仏界湧現 578 ページ 11 行

しょうじき ほうべん す

ほけきょう しん

正直に方便を捨てて、ただ法華経を信じ、

なんみようほうれんげきょう とな

ひと

ぼんのう ごう

く さんどう

南無妙法蓮華経と唱うる人は、煩惱・業・苦の三道、

ほっしん

はんにや

げだつ

さんとく

てん

さんがん

さんたいすなわ

いっしん

法身・般若・解脱の三徳と転じて、三観・三諦即ち一心

あらわ

ひと

しよじゅう

ところ

じょうじゃつこうど

のうご

に。顕れ、その人の所住の処は常寂光土なり。能居・

しよご

しんど

しきしん

くたいくゆう

むさ

さんじん

ほんもんじゆりよう

所居、身土、色心、俱体俱用、無作の三身の本門寿量の

とうたいれんげ

ほとけ

にちれん

でしだんなとう

なか

当体蓮華の仏とは、日蓮が弟子檀那等の中のことなり。

とうたいぎしやう

038 当体義抄

いっしょうじやうぶつ

ぶっかい ゆげん

一生成仏・仏界湧現 617 ページ 1 行

しかるに、日蓮が一門は、正直に権教の邪法・邪師の
邪義を捨てて、正直に正法・正師の正義を信ずるが故
に、当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を顕すこ
とは、本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經と
唱うるが故なり。

038 当体義抄

一生成仏・仏界湧現 626 ページ 10 行

ひとたびみようほうれんげきよう とな

いつさい ほとけ いつさい ほう いつさい

一度妙法蓮華經と唱うれば、一切の仏、一切の法、一切

ぼさつ いっさい しょうもん いっさい ぼんのう たいしや えんまほうおう

の菩薩、一切の声聞、一切の梵王・帝釈・閻魔法王・

にちがつ しゅしょう てんじん ちじん ないしじごく がき ちくしょう

日月・衆星・天神・地神、乃至地獄・餓鬼・畜生・

しゅら にん てん いっさいしゅじよう しんちゆう ぶっしよう ひとこえ よ

修羅・人・天、一切衆生の心中の仏性をただ一音に喚

あらわ たてまつ くどく むりようむへん

び顕し奉る功德、無量無辺なり。

わ こしん みようほうれんげきよう ほんぞん たてまつ

我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉って、我が

こしんちゆう ぶっしよう なんみようほうれんげきよう 呼 呼 あらわ たも

己心中の仏性、南無妙法蓮華經とよびよばれて顕れ給

ほとけ い たと かご なか とり鳴

うところを仏とは云うなり。譬えば、籠の中の鳥なけ

そら とり あつ そら とり あつ

ば、空とぶ鳥のよばれて集まるがごとし。空とぶ鳥の集ま

れば、籠の中の鳥も出でんとするがごとし。口くちに妙法みようほうを

たてまつ

わ み

ぶつしよう

かなら

あらわ

たも

よび奉れば、我が身の仏性もよばれて必ず顕れ給

ぼんのう

たいしやく

ぶつしよう

われ

まも

たも

ぶつ

う。梵王・帝釈の仏性はよばれて我らを守り給う。仏

ぼさつ

ぶつしよう

よろこ

たも

菩薩の仏性はよばれて悦び給う。

(048 法華初心成仏抄

ほつけしよしんじようぶつしよう

いっしょうじようぶつ

ぶつかいゆげん

一生成仏・仏界湧現 703 ページ 16 行)

ごほんぞん

む

なんみようほうれんげきよう

とな

ひとたび御本尊に向かつて南無妙法蓮華経と唱えれば、あらゆる

ほとけ

ほう

ぼさつ

しょうもん

ぼんのう

仏、あらゆる法、あらゆる菩薩、あらゆる声聞、あらゆる梵王、

たいしやく

えんまほうおう

にちがつ

しゅしよう

てんじん

ちじん

じごく

帝釈、閻魔法王、日月、衆星、天神、地神、さらに地獄、

がき ちくしょう しゅら にんてん

ひと

しんちゆう

ぶつしょう

餓鬼、畜生、修羅、人天、あらゆる人びとの心中にある仏性

だいもく ひとこえ よ

ごほんぞん くどく かぎ

を、ただ題目の一声に呼びあらわすのですから、御本尊の功德に限

じぶんじしん せいめい そな

みようほうれんげきよう

りないものなのです。自分自身の生命に備わっている妙法蓮華經

ごほんぞん

なんみようほうれんげきよう とな

じしん せいめい

を御本尊として、南無妙法蓮華經と唱えていけば、自身の生命にそ

ぶっかい よ よ ゆげん

なわる仏界が呼び呼ばれて涌現するのです。たとえば、かこのなかの

とり

そら と

とり

な ごえ

あつ

鳥がさえずれば、空を飛んでいる鳥がその鳴き声によばれて集まつ

そら と とり あつ

てくるようなものです。また、空を飛ぶ鳥が集まつてさえずれば、

こんど

とり そと で

くち

今度はかこのなかの鳥も外に出ようとするようなものです。口に

なんみようほうれんげきよう

とな

じこ せいめい

ぶつしょう

南無妙法蓮華經と唱えれば、自己の生命のなかの仏性もよばれて

こおう

こんど ぼんてん

かならずあらわれてくるのです。それに呼応して、今度は梵天、

たいしやく

しよてんぜんじん

ぶつしよう

よ

わたし

まも

帝釈などの諸天善神の仏性が呼びあらわれて 私たちを守るだ

ほとけ

ぼさつ

ぶつしよう

よ

よろこ

けでなく、あらゆる仏や菩薩の仏性も呼ばれて喜ぶのです。

己心と仏心とは異ならずと観ずるが故に、生死の夢を覺ま
して本覺の寤に還るを、即身成仏と云うなり。
即身成仏は、今、我が身の上の天性・地体なり。煩
も無く、障りも無し。衆生の運命なり、果報なり、冥加
なり。

049 三世諸仏總勘文教相廢立（總勘文抄）

一 生成仏・仏界湧現 716 ページ 1 行

いっさいほう

みな

ぶつぽう

つうだつ

げりよう

「一切法は皆これ仏法なり」と通達し解了する、これを

みようじそく

みようじそく

くらい

そくしんじようぶつ

ゆえ

えんどん

名字即となす。

名字即の位より即身成仏す。

故に、円頓

きよう

じい

しだいな

の教には次位の次第無し。

さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう

そうかんもんしろう

049

三世諸仏總勘文教相廃立（總勘文抄）

いっしょうじようぶつ

ぶつかいゆげん

一生成仏・仏界湧現 717 ページ 17 行

詮せんずるところ、己心こしんと仏身ぶつしんと一いちなりと観かんずれば、速すみやかに

ほとけな 仏ぶつに成なりるなり。故ゆえに、弘決くけつにまた云いわく「二切いつさいの諸しよ仏ぶつ、

己心こしんは仏心ぶつしんと異ことならずと観かんじたもうに由よるが故ゆえに、仏ぶつに

成なることを得えたもう」已上いじやう。これかんじんを観心いと云まことう。実まことに

己心こしんと仏心ぶつしんと一心いっしんなりと悟さとれば、臨終りんじゆうを礙さまたぐべき悪業あくごうも

有あらず、生死しやうじに留とどむべき妄念もうねんも有あらず。

049 三世さんぜ諸しよ仏ぶつ総勘そうかん文教もんしやう相しやう廃立はいりゆう（総勘そうかん文抄もんしやう）

一生成いっしやうじやうぶつ仏ぶつ・仏界ぶつかい湧現ゆうげん 722 ページ 5 行

煩悩ぼんのうの薪たきぎを焼やいて、菩提ぼだいの慧火え現前げんぜんするなり。

（
095 御義口伝おんぎくでん

一 生成仏・仏界湧現いっしょうじょうぶつ ぶつかいゆげん
987 ページ 7 行

みようかく しやくそん われ けつにく いんが くどく こつずい

妙覚の釈尊は我らが血肉なり。因果の功德は骨髓にあら

しやく いん あ しん すす いん あ

ずや。釈には「因を挙げて信を勧む」と。「因を挙ぐ」

すなわ ほんが いま にちれん とな

は、即ち本果なり。今、日蓮が唱うるところの

なんみようほうれんげきよう まつぼういちまんねん しゆじよう じようぶつ

南無妙法蓮華経は、末法一万年の衆生まで成仏せしむる

こんじやいまんぞく

なり。あに「今者已満足」にあらずや。

おんぎくでん

095 御義口伝

いつしやうじようぶつ ぶつかい ゆげん

一生成仏・仏界湧現 1004 ページ 7 行

みようかく しやくそん わたし しゆじよう ち にく いんが くどく ほね

妙覚の釈尊は私たち衆生の血や肉であり、因果の功德は骨

ずい し ほとけ くおんがんじよ

の髓ではないでしようか。（これは師である仏も久遠元初の

じじゅゆうしん でし

しゅじょう

くおんがんじよ

じじゅゆうしん

自受用身、弟子である衆生もまた久遠元初の自受用身としてあら

じじゅゆうしん

やく

していふに

あ

われ、自受用身に約して師弟不二であることを明かされています。

しゃく

てんだいだいし

ほつけもんぐ

いん

あ

しん

すす

また釈（天台大師の法華文句）には「因を挙げて信を勧む」とあ

いん

あ

ほんが

ほとけ

たね

り、因を挙げるのがすなわち本果です。（これは仏の種があることを

さと

じょうぶつ

にちれん

とな

悟らせることを成仏というからです。いま日蓮が唱えるところの

なんみようほうれんげきょう

まつぼうまんねん

しゅじょう

じょうぶつ

南無妙法蓮華経は、末法万年の衆生を、ことごとく成仏せしめ

こんじやいまんぞく

いま

すで

まんぞく

るのです。どうして「今昔已満足」（今昔は已に満足しぬ）でないとい

いえましようか。

いま にちれんら たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ とき むみよう

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る時、無明

わくしようさ

こしん しゃか たほうじゅう

の惑障却けて、己心の釈迦・多宝住するなり。

おんぎくでん

(095 御義口伝

いつしようじようぶつ

ぶつかいゆげん

一生成仏・仏界湧現 1034 ページ 1 行

ほけきよう たも たてまつ
法華經を持ち 奉 るとは、 我が身は仏身なりと持つなり。

095 御義口伝
おんぎくでん

いっしょうじょうぶつ ぶっかい ゆげん
一生成仏・仏界湧現
1035 ページ 2 行

「八」
ひらく

とは、

色しき心しんを妙法みょうほうと開ひらくなり。

（
095 御義口伝
おんぎくでん

一いつ生しょう成じょう仏ぶつ・仏界湧現ぶつがいゆげん

1039

ペー
ジー
10
行

いま にちれんら たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの
今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、

じょうじゅぶっしん うたが

「成就仏身」疑いなきなり

おんぎくでん

(095 御義口伝

いつしやうじやうぶつ

ぶっかいゆげん

一生成仏・仏界湧現

1057 ページ 17 行)

ろつこんしようじよう

ひと

るり

みようきよう

さんぜんせかい

六根清浄の人は「瑠璃」「明鏡」のごとく三千世界を

み

きようもん

いま

にちれんら

たぐ

見るといふ経文なり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

みようきよう

まんぞう

う

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、明鏡に万像を浮かぶ

ちけん

みようきよう

ほけきよう

るがごとく知見するなり。この明鏡とは、法華経なり。

べつ

ほうとうほん

別しては宝塔品なり。

（095 御義口伝

おんぎくでん

いっしょうじようぶつ

ぶつかい ゆげん

一生成仏・仏界湧現

1063

ページー4行

いっさいそくみようほう

いっしん げんてい あらわ

じんみようむげ

一切即妙法なれば、一心の源底を顕すこと甚妙無外なり。
い。わゆる、南無妙法蓮華経は不思議なり。

なんみようほうれんげきよう ふしぎ

おんぎくでん

(095 御義口伝

いっしょうじようぶつ ぶっかいゆげん

一生成仏・仏界湧現 1101 ページ 1 行

1101

いっしん ほとけ
一心に仏を見る心を一にして仏を見る一心を見れば仏
なり。

ぎじょうぼうごしよ
(099) 義浄房御書

いっしょうじょうぶつ ぶつかい ゆげん
一生成仏・仏界湧現
1197 ページ 11 行

きようしやく こころ

ほとけ 成 みち

きようち

そもそも、この経釈の心は、仏になる道はあに境智の

にほう

きよう

ばんぼう

たい い

二法にあらずや。されば、境というは万法の体を云い、

ち

じたいけんしやう

すがた

い

きよう

ふち

智というは自体顕照の姿を云うなり。しかるに、境の淵

辺

深

とき

ちえ

みず

流

恙

ほとりなくふかき時は、智慧の水ながるることつつがな

きようちがつ

そくしんじようぶつ

し。この境智合しぬれば、即身成仏するなり。

そやどのごへんじ

じようぶつようじんしやう

(165 曾谷殿御返事 (成仏用心抄))

いっしやうじようぶつ

ぶつかい ゆげん

一生成仏・仏界湧現 1433 ページ 8 行

きようしやく

ほけきやう

かいしやく

てんだいだいし

ほつけげんぎ

およその経釈 (法華経を解釈した天台大師の法華玄義の

もん

いみ

じようぶつ

みち

きようち

にほう

文)の意味は、成仏する道は境智の二法のほかにないのです。で

きよう

まんぼう

たい

ごほんぞん

ち

すから、境というのは万法の体（御本尊）をいい、智というのは

じたいけんしょう

すがた

きよう

ふち

さいげん

自体顕照の姿をいうのです。しかも、境のふち（淵）が際限が

ふか

ちえ

みず

なが

ししょう

ないほど深いときには、知恵の水が流れるのになんの支障もありま

きよう

みようごう

そくしんじようぶつ

せん。この境と冥合すれば即身成仏するのです。

たほうによらい ほうとう くよう たも 思 そちら

多宝如来の宝塔を供養し給うかとおもえば、さにては候

わ 我が身を供養し給う。 我が身また三身即一の本覚の

によらい

如来なり。

しん たま なんみようほうれんげきよう とな たま

かく信じ給いて南無妙法蓮華経と唱え給え。

あぶつぼうごしよ ほうとうごしよ

263 阿仏房御書（宝塔御書）

いっしょうじょうぶつ ぶっかい ゆげん

一生成仏・仏界湧現 1733 ページ 3 行

くおんじつじよう　しやくそん　かいじようぶつどう　ほけきよう　われ

しかれば、久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我ら

しゅじよう　みつ　まった　さべつ　な　さと　みようほうれんげきよう　とな

衆生との三つ全く差別無しと解つて妙法蓮華経と唱え
たてまつ

奉るところを、生死一大事の血脈というなり。

(276 生死一大事血脈抄

いっしようじようぶつ　ぶつかいゆげん
一生成仏・仏界湧現1774ページー17行)

くおんじつじよう　しやくそん　にちれんだいしようにん　しゅじよう

さて、久遠実成の釈尊（日蓮大聖人）と、あらゆる衆生を

じようぶつ　ほけきよう　もんでいどくいちほんもん　だいごほんぞん　わたし

成仏せしめる法華経（文底独一本門の大御本尊）と、私たち

しゅじよう　みつ　さべつ　しん　りかい

衆生との三つは、まったく差別がないと信じ理解して、

なんみようほうれんげきよう　だいもく　とな　しようじいちだいじ　けつみやく

南無妙法蓮華経の題目を唱えていくことを、生死一大事の血脈

というのです。

「阿鼻あびの依正えしょうは全まったく極聖ごくしょうの自心じしんに処しよし、毘盧びるの身土しんどは

凡下ぼんげの一念いちねんを逾こえず」

（280 諸法実相抄しよほうじつそうしやう）

一生成仏いつしょうじやうぶつ・仏界湧現ぶつかいゆげん

1788 ページ 12 行

ほうとうほん

ただいま

この宝塔品はいずれのところにか只今ましますらんと

勘

そうら

にちによごぜん

おんむね

あいだ

はちよう

しんれんげ

かんがえ候えば、日女御前の御胸の間、八葉の心蓮華の

うち

にちれん

み

そうろう

内におわしますと日蓮は見まいらせて候。

(406 日女御前御返事 (嘱累品等大意の事))

にちによごぜんごへんじ

ぞくるいほんとうたいい

こと

いっしょうじようぶつ

ぶっかいゆげん

一生成仏・仏界湧現

2096 ページ 3 行

ほけきよう

われ

み

ほっしんによらい

われ

こころ

この法華経には、
我らが身をば法身如来、
我らが心をば

ほうしんによらい

われ

振舞

おうじんによらい

と

そうら

報身如来、
我らがふるまいをば応身如来と説かれて候え

きよう

いつくいちげ

たも

しん

ひと

みな

くどく

ば、この経の一句一偈を持ち信ずる人は、
皆この功德を

具

そうろう

そなえ候。

407 妙法尼御前御返事（一句肝心の事）

みようほうあまごぜんごへんじ

いつくかんじん

こと

いっしょうじようぶつ

ぶっかいゆげん

一生成仏・仏界湧現

2098

ページー13行

きよう だいもく

なら よ

おお

さて、この経の題目は、習い読むことなくして大いなる

ぜんこん

そうろう

あくにん

によにん

ちくしよう

じごく

しゅじよう

善根にて候。悪人も女人も、畜生も地獄の衆生も、

じっかい

そくしんじようぶつ

と

そうろう

みず

そこ

いし

十界ともに即身成仏と説かれて候は、水の底なる石に

ひ

ひやくせんまんねん

暗

ところ

ともしび

い

火のあるがごとく、百千万年くらき所にも灯を入れぬ

明

せけん

徒

ればあかくなる。世間のあだなるものすら、なお、かよう

ふしぎ

ぶつぽう

たえ

みのり

に不思議あり。いかにいわんや、仏法の妙なる御法の

おんちから

われ

しゅじよう

あくごう

ぼんのう

しょうじかばく

み

御力をや。我ら衆生の悪業・煩惱・生死果縛の身が、

しょう

りよう

えん

さんぶつしょう

いん

すなわ

ほつ

ぼう

おう

正・了・縁の三仏性の因によりて、即ち法・報・応の

さんじん

あらわ

うたが

三身と顕れんこと、疑いなかるべし。

（
407

妙法尼御前御返事

みようほうあまごぜんごへんじ

（二句肝心の事）

いつくかんじん
こと

いっしょうじょうぶつ

ぶつかい
ゆげん

一生成仏・仏界湧現

2100

ページー4行